



教育の力

牛島義友

私自身、教師ではあるが学校の教育などは子どもの人間形成にそれほど重要な影響は与えないのではなからうかと考えていた。人間形成は自我の自覚によっておこなわれ、教師の考え方や思想などがそのまま子どもに植えつけられるわけではないと考えていた。しかし最近日本とヨーロッパの児童や青年の考え方や態度を調査してみてもあまりにも学校や社会の影響が強いのに驚いている。

たとえば小学校五、六年の年令の子どもに「国のためなら、国民の自由をぎせいにしてもやむをえないと思いませんか」とたずねると日本の子どもたちは三割の子どもが肯定するだけで、五割の子どもはそれを否定し、国民の自由をぎせ

いにすべきではないと考えている。ところがイギリスやフランスの子どもでは国のためにぎせいになることを肯定するものは六割以上もあらわれている。

この問題は民主的な態度を調べるために設けた一つの項目で、われわれ日本人の大多数の人びとは国家のために国民がぎせいにさせられた戦時中のことを思いうかべあのような態度は非民主的なものだと思いきんでいる。ところがイギリスの人びとは国のために、あるいは民主的な社会を守るためには個人をぎせいにするのもやむをえないと考えているし、またこのように国のために身をぎせいにした人を心から尊敬して戦没者や戦傷者に対する感謝と尊敬の気持をあらゆる機会

にあらわそうとしている。イギリス人の考えでは民主的であることと、国のために個人の自由をぎせいにすることはなんら矛盾するものではないと考えている。このおとなや教師たちの考え方が実は子どもたちの答にそのままそっくりあらわれている。

その他親に対する態度を聞いてみた。日本の子どもには「お父さんやお母さんを助けるためなら、自分はどうなってもかまいません」に対してこれを肯定するものはごく少数であるが、イギリスやドイツの子どもには当然の子ども義務として肯定者が非常に多くなっている。親孝行は昔の日本の道徳の最も誇とした徳目であったが、今ではヨーロッパの子どもの方がはるかに親中心の考え方をしている。

これらのことから日本の子どもがより進歩的かどうかということを論ずることもできないではないが、しかし私はそれよりもこれらの子どもたちの答の中にあまりにも日本の今日の社会の考え方、教師の考え方が強く反映しているのに驚き、恐怖さえ感ずる。これらの報告を聞いたフランスの学者は日本人の考えている民主主義はスペインのそれに似ており、アナキズムではないかと批評された。フランス人には特に愛国心が強く、アナキズムを極度に嫌う風潮がある。たしかに今日

の日本の民主主義の中には基本的な人権の主張だけが強く、国家などを軽視する考えが強く、それが進歩的な民主主義だと思っている。しかしそれはフランス人にいわすとスペインの民主主義にすぎない。

あるいはまた子どもの宗教的な考え方を調べてみると、この点でも欧米の子どもと著しく相違して、日本の子どもには神中心的な宗教的な考え方がほとんどなく人間中心的な考え方であり、宗教を軽く取扱った合理主義的な考え方が濃厚にあらわれている。このような子どもの考え方を調べてみると、それがあまりにも日本とヨーロッパで相違し、しかもそれぞれの国の考え方や態度がそのまま強く反映しているのを感じる。思想とか人生観とか社会的態度というものは個性によって形成されるものといわれているが、実は社会や教師の考え方や価値体系がそのまま子どもの中にいつのまにかうえつけられてしまっている。

元来子どもは知能や性格は国によって民族によってそれほど相違するとは思われないが、出来上った人間像は日本人とイギリス人、フランス人と著しく違った考え方をするものになってしまっている。

ただものの考え方が影響されるだけでなく、生活行動

の型まで影響されている。先ほどの民主的な態度でいえばイギリス人などはイデオロギー的には必ずしも民主的(？)進歩的ではなく、むしろ保守的であり急進的な小児病的な要素はなく、折衷的、調和的であるが、生活態度そのものは日本に比べはるかに人の自由と個性を尊重し、少数者の意見も重んずるし、また自由に意見はいつでも共同の約束を尊重して分裂的な行動の自由は要求しない。その議会政治をみても保守党の中にも労働党が主張する要素がほとんど含まれており、どちらの政党が変わっても社会は安定を保ちつつ前進する。婦人の地位とか子ども福祉というような点でもこれこそ民主的な社会といえるような優れた社会生活をしている。イギリスの子どもたちもまたこのイギリスのおとなたちの生活態度をそのまま身につけており、学校の中ではふしぎなほどおとなしく先生に対しては従順である。

一方日本人たちは思想の面ではなかなか進歩的にはなかったが、その行動はいっこうに民主化したとはいえない。政治となればすぐ多数派の横暴、全体主義的、ファッショ的傾向があらわれ、またそれに対立するものはあたかも革命前後のごとき先鋭化した行動をとろうとし、日本の社会はいつ激変するかもしれないといった不安におそわれる。男女の交際な

どは自由にはなったが、しかし全くの無軌道な性の解放に流れようとしたり、子どもの教育もしつけのない自由になり、民主主義のはき違えといわれるような行動になっている。他方農村などにいくと昔ながらのあまりに封建的な生活態度が続けられている。このように思想的には進歩的だが、行動的には封建的ないしは無政府主義になっているが、この姿が子どもの意識と行動の中にそのまま反映している。子どもの答え方が民主的だからといってすぐ日本の子どもが民主化されていると考えればとんでもない誤解に陥るであろう。

このように子どもたちの意識や生活はそのまま社会の縮図となってしまうている。これは恐ろしいことではなからうか。小さい子どものうちからこのようにそれぞれ違った考え方をし対立していたのでは到底相互の理解とか統一的世界国家などというものは期待できないであろう。日本と西洋とは社会経済的には比較的接近してなおかつこれほど激しい差がある。まして回教圏や印度、東南アジアなどの人びとと同じ枠でものを考え、共同して仕事をするのはなかなかたいへんなことだと思し、更に社会経済的に根本的に対立しておる、ソ連や中共の人びとと話合ったり相互の理解を得るといふことは絶望的というような感じがする。せめて子どもたちだけ

は共通の目で見、偏見にとらわれない立場で話合いたいと望むが、これは期待のできないことかもしれない。

このように悲観的な考えがわいてくるが、しかし考え直してみるとこの諸民族、諸国民の相違はその人種の違いか体質や性格のような先天的相違というよりも、後天的な社会的なものに大きく影響されている。フランス人と日本人とは人種的には何のつながりもないが、そのものの考え方にはかえって非常な近いつながりが感じられる。フランス人はアメリカ人に接するよりも日本人に接した方が親近感が深いといっているし、またわれわれもフランスの文学や芸術、あるいは主知主義的なヒューマニスティックな考え方には近似性を感じ、また事実フランスの文化や思想がそのまま日本の文化や思想の中にとり入れられている。

またしばしば述べるように今日の日本の児童や青年の考え方はヨーロッパのそれと同じように民主的に考えたり同じように西欧的な考え方をしている。いわゆる東洋的なもののかえ方というものは子どもたちの中に案外見出しにくくなっている。このようなものの考え方や文化の類型は絶えず変化するものであり容易に変えることができるものである。特に教育の力によって著しく変革される。故に日本の文学や映画、思

想、科学が西欧のものをとり入れ（外国の文化を日本ほど素直にとり入れている民族も類が少なからう）、またこの直接の媒介者として教師たちのものの考え方が彼らと共通になってくれば子どもたちの考え方もまた外国の人たちと共通になれるという見込みもついてくる。近代的な学校においてはカリキュラムや教科内容が各国において共通性が増しており、理科系統ではほとんど同じであり、社会科学においても共通性が多いのでこの近代的学校教育を媒介として各国の人が互に近づき合えるという可能性もふえてきた。世界中の教師が手を取り合い同じ立場で共通の問題を考えるようになれば子どもたちもまた互に手を取りあい同じ立場でものを考えることが可能となる。

故に先ず必要なのは教師たちがその眼を世界に向け偏見や自己の利益にとらわれず、人類の幸福と文化の進歩を求めてすすむことである。小さな幼児たちにものを教える場合にも常にこの態度をはっきり自覚していたならばやがて子どもたちの時代には世界は一つとなり平和と共存の社会が実現されてくるのではなからうか。

*

*